おいしい水

高校時代、友達との待ち合わせによく使った喫茶店があった。小田急線の下北沢の線路わきをちょっと横に入った所なのだが、小ぢんまりとした木造りの店で、「おいしい水」という名前の店だった。

わたしは張り出し窓の横の席に座って、友達が来るのを待ちながら、わたしもいつかこんな小さな自分だけの“宇宙”が持てたらいいな、といつもぼんやり考えていた。

アントニオ・カルロス・ジョビンのボサノバに『おいしい水』という曲があると知ったのは、20歳を過ぎてからだ。

恥ずかしながら、それまで高校のときによく行った喫茶店「おいしい水」の店の名前がボサノバに由来していることなど全く知らなかった。というよりも、ボサノバ自体、一体何なのかもわからなかった。

どう考えたって才能ありそうもないのに、20歳になったある日、そのころのめり込んでいたシャンソンを自分でも歌ってみたいと思う一心で、ある先生の所へ通い始めた。先生はわたしの声を聞くなり、「アストラッド・ジルベルトを聴いてごらん」と言った。

物語のタイトルをつけるのが苦手なわたしが、今回ばかりは小説の中身を書き上げるよりも先にタイトルが決まっていた。

ジルベルトのかれた官能的な歌声を聴くと、20歳のころ、行きつ戻りつ、もんもんとすごしていた日々がわたしの中で、妙に重なり合ってよみがえってくる。

小説『おいしい水』は、タイトルが決まったときから、自分で意識してはいなかったことだけれども、波間を漂うような今までの日々とのひとまずの決着、を目指していたのではないかと思う。

椎名桜子『それでもわたしは白い服がほしい』マガジンハウスより